

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成27年 3月31日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局： 生態学研究センター

職 名： センター長

氏 名： 中野 伸 一

| | | | |
|------------|--|---|-------------|
| 助成の種類 | 平成26年度・社会連携助成 | | |
| 事業名 | シリーズ公開講演会「つなぐ・つながる生物多様性 -大学共同利用・共同研究拠点による生態学が捉えた地球生物圏の変化」 | | |
| 実施期間 | (第1回)平成26年7月26日(第2回)平成26年9月20日(第3回)平成26年10月25日 (第4回)平成26年12月13日(第5回)平成27年3月8日 | | |
| 実施場所 | (第1回)コラボしが21(第2回、3回、5回)大学コンソーシアム京都キャンパスプラザ 京都 (第4回)京都市勧業館「みやこめっせ」 | | |
| 参加者 | 総数: 258名 | 内訳: (第1回)43名(第2回)26名(第3回)72名(第4回)75名 (第5回)42名 | |
| 成果の概要 | タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(公開講演会チラシ5枚) | | |
| 会計報告 | 事業に要した経費総額 | 1,341,165円 | |
| | うち当財団からの助成額 | 1,000,000円 | |
| | その他の資金の出所 | (機関や資金の名称) | 運営費交付金 |
| | 経費の内訳と助成金の用途について | | |
| | 費目 | 金額 (円) | 財団助成充当額 (円) |
| | 旅費・滞在費 | 520,580 | 520,580 |
| | 印刷代 | 343,440 | 116,565 |
| | 謝金 | 213,400 | 213,400 |
| 消耗品費 | 144,600 | 96,000 | |
| 会場及び備品借料費 | 68,770 | 3,080 | |
| 郵送費 | 50,375 | 50,375 | |
| 合計 | 1,341,165 | 1,000,000 | |
| 当財団の助成について | (今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) | | |

京都大学の共同利用・共同研究拠点を利用した生物多様性研究の成果を地域社会に発信するために、平成 26 年度に全 5 回のシリーズ公開学術講演会「つなぐ・つながる生物多様性 - 大学共同利用・共同研究拠点による生態学が捉えた地球生物圏の変化」を実施した。地球環境の劇的な変化に伴い、生物多様性が危機的状況に瀕しており、21 世紀において解決しなければならない課題である。環境問題においては、時間・空間的に離れた現象が相互に関連しているために、その把握と解決のためには包括的な視点で自然や社会にアプローチすることが必要となる。生態学への社会的要請と役割はますます大きくなっており、関連研究機関が共同して課題の解決にあたるしくみを強化することが必要である。今回の公開講演会においては、生物多様性危機の現状の理解を進め、環境問題の解決において京都大学における共同利用・共同研究拠点活動が果たしている役割を発信した。

京都大学生態学研究センターは、京大における伝統ある学術潮流の一つである生態学の総合的基礎研究を目指す研究機関として設置され、生態学に関する共同研究を推進する全国共同利用施設として機能してきた。平成 22 年度から生態学・生物多様性科学における共同利用・共同研究拠点となり、国内外の研究者に対して広く共同利用・共同研究を推進している。その成果は、研究者コミュニティだけでなく社会に対して発信されるべきであり、中期計画において公開講演会「京都大学の共同利用・共同研究拠点を利用した生物多様性研究」を実施することを部局の行動計画に定めた。その計画に沿って、公開講演会実行委員会を平成 25 年度に立上げ、万全の体制で実施にあたった。

生態学研究センターの共同利用・共同研究の特徴として、大津臨湖実験所以来の琵琶湖研究の長い歴史と琵琶湖調査船を生かした研究、各地のフィールド拠点を活用した研究、次世代シーケンシングの分子解析技術を野外に適用する技術などがあげられる。公開講演会は、これらの成果を地域社会に向けて発信するために、当初 3 回シリーズとして企画されたが、好評を博したため、2 回追加し全 5 回で実施した。テーマは、上記の共同利用・共同研究拠点の特徴を順次紹介する内容とした。特に生態学研究センターの前身の 1 つである京都大学大津臨湖実験所の開所から 100 年を経過したことを記念し、第 1 回講演会を大津臨湖実験所 100 周年記念事業と位置付けた。

5 回の講演会の内容は、以下のとおりである。

第 1 回 「京都大学の琵琶湖研究 100 年と今後の多様な共同研究のために---大津臨湖実験所開所 100 周年記念事業」

平成 26 年 7 月 26 日（土）13：30～17：00、於：コラボしが 21 3F 会議室

- ・京都大学の琵琶湖研究 100 年：大津臨湖実験所から生態学研究センターまでの 100 年間 中野 伸一（京都大学生態学研究センター・センター長）
- ・琵琶湖に忍びよる地球温暖化の影－鉛直水循環の脆弱化と化学環境の変化－ 杉山 雅人（京都大学人間環境学研究科・教授）
- ・栄養塩の生成量や消費量を測る：その意義と新手法への挑戦 角皆 潤（名古屋大学院環境学研究科・教授）

- ・琵琶湖の底にすむ生き物たち：浅い湖底、深い湖底で起こっていること
井上 栄壮（滋賀県琵琶湖環境科学研究センター・研究員）

第2回 「世界自然遺産サイトでの生物多様性研究と保全対策：小笠原・白神山地を例に」
平成26年9月20日（土）13：30～16：00、於：大学コンソーシアム京都キャンパスプラザ
京都 第一講義室

- ・小笠原樹木の乾きに耐える仕組みとその独特の進化
石田 厚（京大大学生態学研究センター・教授）
- ・小笠原での外来種対策と生き物のつながり
可知 直毅（首都大学東京理工学研究科・教授）
- ・白神山地の生物多様性と生態系サービス
中静 透（東北大学生命科学研究科・教授）

第3回 「大規模生物現象：大発生・一斉開花・大量死の科学」
平成26年10月25日（土）13：30～16：00、於：大学コンソーシアム京都キャンパスプラザ
京都 第一講義室

- ・タケ・ササの周期的一斉開花・枯死現象に迫る
蒔田 明史（秋田県立大学生物資源科学部・教授）
- ・コイの大量死から見えてくる世界
川端 善一郎（総合地球科学研究所・名誉教授）
- ・ボルネオ熱帯林の一斉開花現象：20年でどこまでわかったか
酒井 章子（京大大学生態学研究センター・准教授）

第4回 「データベースの構築と活用から見えてきた！ 新しい生物多様性のサイエンス」
平成26年12月13日（土）13：30～16：00、於：京都市勧業館「みやこめっせ」大会議室

- ・生物多様性の地図化：なぜ、日本は植物多様性ホットスポットなのか？
久保田 康裕（琉球大学理学部・准教授）
- ・植物の多様な形を俯瞰する
小野田 雄介（京都大学大学院農学研究科・助教）
- ・DNA バーコーディングで菌類の多様性を探る
大園享司（京大大学生態学研究センター・准教授）

第5回 「花の生態学 多様性の謎はどこまでわかったか」
平成27年3月8日（日）13：30～15：40、於：大学コンソーシアム京都キャンパスプラザ
京都 第一講義室

- ・サトイモ科植物とタロイモショウジョウバエの送粉共生
高野（竹中） 宏平（東北大学大学院生命科学研究科・研究員）
- ・マツブサ科植物を送粉するタマバエ
三宅 崇（岐阜大学教育学部・准教授）

・カンコノキとハナホソガの絶対送粉共生

川北 篤（京都大学生態学研究センター・准教授）

以上 5 回の講演会を通して、258 人の参加者（第 1 回 43 人、第 2 回 26 人、第 3 回 72 人、第 4 回 75 人、第 5 回 42 人）があった。貴財団の助成により、京都大学の共同利用・共同研究拠点を利用した生物多様性研究の成果を地域社会に発信することができた。ここに感謝を表し、概要の報告とする。